特集　果樹の高品質生産技術

近年の果樹生産は気候の影響を受けにくい栽培技術やより付加価値を高める生産技術が求められている。ここでは主に県中南部で栽培されているイチジク、ブドウ及び県北部の特産品である青ナシ、アサクラサンショウについて紹介する。

玉木　克知（農産園芸部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－2424）

イチジクでは主幹を長くすると着果がよくなり収量アップ！

イチジクの「オーバーラップ整枝」において、主幹部の長さが着果と果実の収量に及ぼす影響を調査した。その結果、主幹を長くすると果実の着果が向上し、収量が多くなることが分かった。

内　容

イチジクのオーバーラップ整枝（特許6840311号）は主枝を片側1方向に伸ばし、その主枝を隣接樹の主幹の上に重ねることで凍害回避が可能な樹形として開発された。また、従来の一文字整枝に比べ主幹部を長く設定できることから、樹勢抑制効果による着果安定効果も期待される。そこで、主幹部の長さが異なるオーバーラップ整枝樹において、結果枝の着果状況と結果枝１本当たりの収量について調査した。

主幹長が１mと1.5mの６年生のイチジク「桝井ドーフィン」のオーバーラップ整枝樹の結果枝において、幼果が着果した最下節位（以下、着果開始節）と着果した節の割合（以下、着果率）を比較した。その結果、着果開始節は主幹長の違いによる差はみられなかったが、着果率は１mに比べ1.5mで高くなった（表）。次に、結果枝１本当たりの時期別累積収穫果数を比較したところ、８月中旬以降１mに比べ1.5mの収穫果数が多く推移した（図）。

表　主幹長の違いが着果に及ぼす影響（2019年）

主幹長	着果開始節	着果率
1m	3.9節	82.6%
1.5m	2.5節	92.3%
有意性[z]	ns	*

[z] t検定により、*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なしを示す（n=4、ただし着果率はArcsin-Radian変換後による）

今後の方針

主幹長を２mとした場合についても検討を行い、圃（ほ）場条件に応じた実用的な主幹長を検討する。

宗田　健二（農産園芸部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－2424）

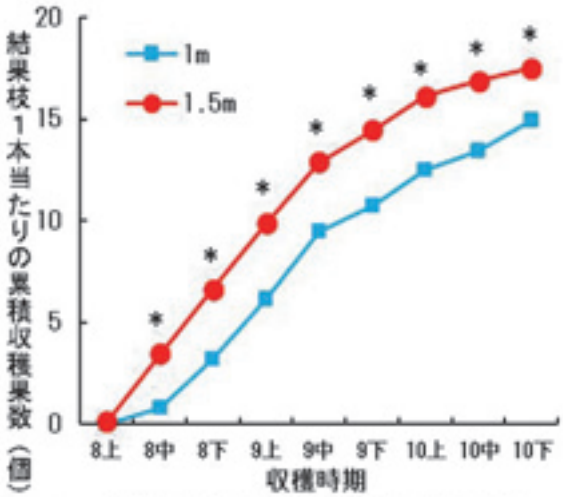

図　主幹長が収量に及ぼす影響（2019年）
図中の*はt検定により、5%水準で有意差ありを示す（n=4）